
 研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 9
P.41-51 (2021)

基礎看護学の授業内容と臨地実習での看護実践との 結びつきに関する学生の認識

Student's Recognition about the Relation between Lesson Content of Fundamental Nursing and Nursing Practice in Clinical Training

笹野 幸春¹⁾ 渡邊 和信¹⁾ 影山 孝子¹⁾
 SASANO Yukiharu WATANABE Kazunobu KAGEYAMA Takako
 榎子 嘉美²⁾ 島田 千恵子³⁾
 KUWAKO Masumi SHIMADA Chieko

要 旨

目的：臨地実習を終えた学生の基礎看護学の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきに関する認識を明らかにする。方法：A看護大学の4年生へのフォーカスグループインタビュー法を用いた質的記述的調査。結果：研究協力に同意を得た4年生10名のインタビューデータから、258のコード、31のサブカテゴリ、14のカテゴリが抽出された。基礎看護学の授業内容のうち「生活援助技術」「フィジカルアセスメント」と臨地実習が結びついていると認識したことを示すカテゴリは、「授業で繰り返し練習を行い実習中も練習することで身につく」「基礎の授業を土台として実習で看護技術の応用を学び看護ケアをする」「指導者や教員からのポジティブフィードバック、患者からの言葉を受け止める」「実習当初は上手くできないが経験していくことで看護ケアが上達する」等6カテゴリであった。両者を結びつけられなかったと認識したのは、「授業中は実習のイメージが湧かず実習中は授業を振り返ることができない」「不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない」「看護ケア機会の減少と看護技術が定着していないことで達成感の無さがある」等8カテゴリであった。

索引用語：基礎看護学、授業内容、看護実践、看護学生

Key words：Fundamental Nursing, Lesson content, Nursing practice, Nursing student

1. はじめに

急速な少子高齢化の進展や医療技術の進歩などにより、看護基礎教育、特に看護技術教育の課題について多くの議論や取り組みが行われている。それらの課題の一つに、看護業務の複雑・多様化、国民の医療安全に関する意識の向上等による看護学生の看護技術の実施の範囲や機会が限定される傾向にあることが挙げら

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 富山県立大学看護学部

3) 元順天堂大学保健看護学部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Toyama Prefectural University Faculty of Nursing*

3) *Former Juntendo University Faculty of Science and Nursing*

れる¹⁾。そのため看護学生の看護技術の担保が求められるようになり、2002年の「大学における看護実践能力育成の充実に向けて」²⁾には、看護学生が臨地実習で経験する看護技術項目の内容や到達度が示された。さらに2008年には「看護師教育の技術項目の卒業時の到達度」³⁾が示された。このように文部科学省や厚生労働省では看護学生の看護技術習得についての討議や修正が繰り返し行われている^{4) 5)}。以降、各看護系大学ではこれらの指標を参考に、卒業時の看護技術の到達度評価などが行われるようになった。また、臨地実習において経験した看護技術の到達度評価として、各大学独自の「技術経験録」が作成されるようになった⁶⁾。2020年の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告」では、大学の具体的な役割として、講義、演習と臨地における実習を連環させて効果的な教育を推進し学生の学修環境を整備する必要性が述べられている⁷⁾。こうした中で臨地実習における看護技術教育や評価に関して、臨地実習の「看護の実践」の自己評価に関する研究^{8) 9)}、臨地実習、授業内容や演習の評価として技術経験録を使用した研究^{10) 11)}等が発表されている。しかし、これらの研究は文部科学省や厚生労働省の報告書を参考に看護技術習得に関するスケールを作成し、看護学生の看護技術習得到達度を把握しているものであった¹²⁾。また臨地実習の各看護学領域単独の評価でとどまっておき、基礎看護学の講義、演習と他領域の臨地実習がどのように関連を持ち看護学生の看護技術習得につながっているかに関した研究は少ない。

基礎看護学領域の必修科目に「生活援助技術」「フィジカルアセスメント」がある。これらは看護実践に必要とされる基本的な知識、技術および態度を習得することを目的としている。臨地実習中の学生からは、「基礎の授業の重要さに気が付いた」や、反対に「実習病棟で指導者や看護師が行っている看護実践が授業内容と違う」などの声を聞いた。これは学生が臨地実習で

の看護実践の体験を通して、基礎看護学領域の科目と臨地実習での看護実践がつながっていることに自ら気づき、科目間を結びつけて振り返っていたと考えられる。このように学生の体験を通して科目間の結びつきを考えたときに、基礎看護学領域の「生活援助技術」や「フィジカルアセスメント」の授業内容や演習の評価は科目の単一的な評価を行うだけではなく、看護学生の3、4年次の臨地実習における看護実践の状況を踏まえて評価を行うことも必要なのではないかと考える。佐藤¹³⁾は、「カリキュラムを捉え直すことは、子どもの学習経験の価値を学校カリキュラムの閉じたシステムの中でのみ捉えるのではなく、子どもの実感に根ざし子どもと経験を共有しつつ、より広い社会的、文化的な視野から捉え直す」と論じている。これは、学生の学びの中にカリキュラムにおける科目間の結びつきに対する実感が含まれることを示唆していると考えられる。既存の評価方法であるレポートや評価基準に照らした臨地実習の評価等では、学生と経験を十分に共有することは難しい。臨地実習を終えた学生と学びを共有しながら振り返ることで、基礎看護学領域の科目と臨地実習における看護実践との結びつきをどのように認識したのか知ることが可能となり現在行われている基礎看護学領域の授業評価につなげられると考えられる。

そこで、基礎看護学の授業や臨地実習の評価方法、指導方法や学生の学習環境を検討する基礎的資料として、学生が「生活援助技術」と「フィジカルアセスメント」の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきをどのように認識しているのか明らかにすることとした。

II. 研究目的

本研究の目的は、臨地実習を終えた学生が、基礎看護学の「生活援助技術」や「フィジカルアセスメント」の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきをど

のように認識しているのかを明らかにすることである。

III. 用語の定義

臨地実習：本研究における臨地実習とは、成人看護学実習と高齢者看護学実習とする。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

フォーカスグループインタビュー調査を用いた質的記述的研究デザイン

2. 研究対象

2018年7月に全ての看護学領域の実習(2017年度)を終えたA大学の4年生。

1年次前期に生活援助技術、2年次前期にフィジカルアセスメント、3年次後期から4年次前期にかけて領域別実習を履修した。A大学では生活援助技術やフィジカルアセスメントの演習時に、学生に対して教員による看護技術のデモンストレーションや事前に撮影した映像を事前学習として閲覧させる等の授業を展開していた。また、学生は演習で学んだ看護技術の手順や根拠を自身の学習ノートにまとめるように指導を受けていた。臨地実習は2施設で行われており、学生1人が1人の患者を受け持ち、看護実践を行っていた。

3. データ収集期間

研究対象者の全ての看護学領域の実習が終了した2018年12月

4. 調査方法

対象者が在籍している大学の学部長に研究協力依頼書を提示し口頭にて説明し、承諾を得た後に大学の電子ツールを用いて4年生全員に対して研究協力の概要を通達した。後日、研究協力の意思がある学生に対して再度研究協力依頼書を用いて説明した。同意を得たのちに半構成的インタビュー法でフォーカスグループインタビューを実施した。フォーカスグループインタビューは、共通の経験や特徴をもつ人でグループを

編成し、そのグループ内での相互作用を活用し、関連した特定の問題や論題についての理解、感情、受け止め方、認識、生の声を引き出し探索する質的研究方法のひとつである。本研究では、研究対象となる4年生が1,2年次の基礎看護学の授業内容や臨地実習での看護実践を振り返り語る必要性がある。そのため相互作用を活用し効果的にデータを得るためフォーカスグループインタビューを用いた。

インタビューには2人の研究者を配置し、面接者1人とグループ内の様子を記録する記録者1人とした。面接者と記録者は、研究対象者に対して基礎看護学の授業および臨地実習の指導を担当していない研究者とした。

5. 調査内容

基礎看護学の授業内容と臨地実習における看護実践の結びつきに焦点を当て語れるように、1,2年次の基礎看護学の授業の状況や臨地実習での体験を想起できるような内容とした。生活援助技術やフィジカルアセスメントを学んだ時の記憶や臨地実習で受け持った患者に修得した看護技術を活用できたか、自身の看護技術が習熟したと感じたターニングポイント等である。

6. データ分析方法

対象者の承諾を得て、ICレコーダーを使用しインタビュー内容の録音を行った。録音された内容を逐語録としてデータ化し、逐語録を文脈ごとに精読しながら学生が基礎看護学の授業内容と臨地実習における看護実践の結びつきについて語られている部分を一つの文として抽出した。抽出された文が意味する内容について、可能な限り学生が語った言葉を使用し、文意を損なわないように解釈しコード化した。抽出した全ての文のコード化が終了したのちに、類似性のあるコードをまとめてサブカテゴリーとした。さらにサブカテゴリーを学生の「結びついている」と「結びつけられないでいた」という認識に焦点をあててまとめ、カテゴリーを導き出した。サブカテゴリー、カテゴリー化

する際も、データの文脈の意味を損なうことの無いように逐語録に戻りながら作業を行った。

V. 倫理的配慮

本研究では、以下の倫理的配慮を行った。①研究者と対象者は教員と学生という関係であり強制力が働く恐れがあるため、研究への協力は自由意思であり、協力をしない場合も不利益は生じないことを明記し伝えた。また、基礎看護学の科目や臨地実習の評価は既に確定されており、インタビューの回答内容は成績に一切影響を及ぼさない事を伝えた。②インタビュー日時を複数用意し対象者が選べるよう配慮し日程の調整を行った。③研究協力の撤回はインタビュー調査を行う直前まで可能であること、個人と施設の情報の保護、研究結果の公表について文書と口頭で説明し同意を得た。④ICレコーダーに録音された音声データは、逐語録を作成する段階で匿名化を行った。インタビューを担当した2人以外の研究者には匿名化された逐語録を共有した。⑤逐語録を含むすべてのデータは鍵のついたロッカーに10年間保存し、その後可能な限り保存する。なお、本研究は順天堂大学保健看護学部研究等倫理委員会による倫理審査を受け、承認（順保倫第30-08号）を得たのちに実施した。

VI. 結果

研究協力の同意が得られた看護学生は10名で、平均年齢21.7歳、性別は全て女性だった。10名を2グループに分け、フォーカスグループインタビューを実施した。インタビューの平均時間は71分であった。学生が認識する基礎看護学の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきに関するデータから258のコード、31のサブカテゴリー、14のカテゴリーが導き出された。14カテゴリーは「結びついている」という認識6カテゴリー、「結びつけられないでいた」という認識8カテゴリーに分類された。なお、本研究

における文中の表記は、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、学生の語りを「 」とした。

1. 「結びついている」という認識

学生が「結びついている」という認識を示したカテゴリーは6カテゴリーであった（表1）。

カテゴリー【授業で繰り返し練習を行い実習中も練習することで身につく】は、〈実技テストのために練習を繰り返す〉〈実習中に実技練習を行う〉〈繰り返し練習した技術やケアは身につく〉の3つのサブカテゴリーから構成されていた。「それ（実技試験）に向けて、何回も練習するし。自分の中で」というように基礎看護学の実技試験に向けて何回も練習を行っていた。また、「それで1回練習してから行ったのがあったので、それでちょっと自信持ってやることができました」と臨地実習中も学内で実技練習を行うことで自信をもって臨地実習で看護実践を行えるようになっていた。基礎看護学の授業での技術練習を経て臨地実習中も繰り返し技術練習を行い、教員からも継続した指導を受けることで「割と、その、練習もするので、身につけてるっていうか、その、授業のときやったっていうよりは、なんか、身につけてる」と看護技術の習得の過程を実感していた。

カテゴリー【基礎の授業を土台として実習で看護技術の応用を学び看護ケアをする】は、〈授業で習っていない援助方法を実習で行う〉〈看護師の技術を観察し評価する〉〈演習とは違い実習では看護技術の応用が必要〉〈実習では基礎の授業が土台となる〉の4つのサブカテゴリーから構成されていた。「（点滴の更衣）授業でやってないもんね、全然」のように学生は臨地実習で授業で学んでいない看護技術を行う経験を経て、「授業で習ったときはやっぱり基本の方法だったので、その、応用しなきゃいけない」と述べ、臨地実習では基礎看護学の授業で学んだ看護技術だけでは通用せず、応用が必要であると感じていた。そして、「基礎にあるのプラス、その、領域の、病棟の看護師さん

表 1

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
授業で繰り返し練習を行い実習中も練習することで身につく	実技テストのために練習を繰り返す	実技試験に向けて何回も練習する テストのために練習を頑張った
	実習中に実技練習を行う	練習してから援助をしようと自信をもってできた 実習中の学内日で練習をした
	繰り返し練習した技術やケアは身につく	練習をすると身につく 授業でたくさんやったからできる
基礎の授業を土台として実習で看護技術の応用を学び看護ケアをする	授業で習っていない援助方法を実習で行う	点滴の更衣は授業でやっていない(同意あり) 実習中に授業で習っていないケアをきつく言われた
	看護師の技術を観察し評価する	授業で習った手順で看護師のやり方を吸収していた 看護師の技術と授業で習った技術を比べる
	演習とは違い実習では看護技術の応用が必要	習ったのは基礎の部分だが臨床では応用をきかせた対応が必要 初めは基本通りに行いその後に変えていく
実習当初はケアが上手くできないが経験していくことで看護ケアが上達する	実習では基礎の授業が土台となる	基礎の授業で土台を作った 実習中に考えていることが基礎の授業とつながっている
	初期の実習は練習していても準備やケアが上手く行えない	必要なケアを練習していたが最初はできなかった 最初の実習では物品の取り忘れも多かった
	実習中に看護技術が上手くなる	実習で教えてもらいながら陰部洗浄を毎日行うと慣れてくる 技術は重ねるうちに上手くなると感じる
指導者や教員からのポジティブフィードバック、患者からの言葉を受け止める	患者の状態に合わせたケアが行える	看護技術が上達し患者に負担かけないように考えて行った 看護技術の回数を重ね慣れていくうちに患者の安楽がわかるようになる
	環境整備の重要性をケアを通して理解する	患者の安全確保から環境整備の基本を感じた 環境整備で感染を防げて大事なケアだと実感した
	ポジティブフィードバックを受け止める	教員や指導者に褒められて頑張れた 褒められることで認められたと感じ上達する
自分と友達を比較しあいながら授業資料以外の資料を活用し実習を経験していく	患者からの言葉を受け止める	患者からの言葉で上達する 患者からの感謝の言葉がうれしい
	実習では授業資料より自分でまとめたノートや参考書を活用する	自分で作ったノートを実習でたくさん見る ノートは実技ができるぐらい使えるものになった
基礎看護学の学習環境が整っていたことに気づく	友達との競争意識から比較し学びあう	友達のケアから学んだ 友達の看護技術の工夫を観察し取り入れる
	実習に出て学校の良いところを感じる	学校の物品が揃っていた(同意あり) 実習に出て学校の良いところを感じる(同意あり)
	実習前の演習に対する態度や教員との関りに対する後悔	演習で積極的に挑戦すればよかった もっと練習をして先生に聞いたりしとけばよかった

のやり方を吸収してくって感じだった気がします」と臨床指導者の看護技術を見学し応用を学ぶことで、基礎看護学の演習や自己練習で習得した看護技術を習熟させていた。このような学習プロセスを経て学生は、「基礎看護学で勉強してきたことが実際臨床で実習に行って、ほんとに基礎になることだった」と臨床実習で看護技術の応用を学び実践するためには、基礎看護学での学びが土台となっていたことを実感していた。

カテゴリー【実習当初はケアが上手くできないが経験していくことで看護ケアが上達する】は、〈初期の実習は練習していても準備やケアが上手く行えない〉〈実習中に看護技術が上手くなる〉〈患者の状態に合わせたケアが行える〉〈環境整備の重要性をケアを通し

て理解する〉の4つのサブカテゴリーから構成されていた。学生は、「でも、全然、最初のうちはできなかったなっていう記憶があります」のように初期の臨床実習は練習を行っていてもケアの準備やケア自体が上手く行えていないと感じていた。しかし、「ケアがどんどん早くなっているっていうのを感じたので、それに行くにはやっぱりこの生活援助技術とかフィジカルの授業を丁寧に教えてくださったのがやっぱり良かったのかな」と授業で習い臨床実習で経験していくことで看護技術が上達していくことを実感していた。そのため、「患者さんに負担かけないような陰洗の仕方を考えてって、最終的には患者さんに負担かけないようにできたかなって思えるときがあった」と患者の状態に

合わせたケアが行えるようになっていた。

カテゴリー【指導者や教員からのポジティブフィードバック、患者からの言葉を受け止める】は、〈ポジティブフィードバックを受け止める〉〈患者の言葉や態度を受け止める〉の2サブカテゴリーから構成されていた。「褒められて、初めて認められたみたいな感じで、上達してくっていか」のように学生は教員や指導者から肯定的に認められることで自身の看護技術の向上を再認識していた。臨地実習では「患者さんとかに『うまいよ』とか」と受け持ち患者からの肯定的な反応も受け止めていた。また、基礎看護学の演習においても教員からの肯定的な評価を好意的に受け止めており、一貫した肯定的な評価は学生が自身の看護技術に自信を持つ一助となっていた。

カテゴリー【自分と友達を比較しあいながら授業資料以外の資料を活用し実習を経験していく】は、〈実習では授業資料より自分でまとめたノートや参考書を活用する〉〈友達との競争意識から比較し学びあう〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。「自分で作ったノートは領域のときにめっちゃ見る」や「それ（学習ノート）も持ってったりとかもする、できるぐらい使えるものにはなりました」と学生は、基礎看護学の授業で作成した学習ノートを臨地実習に持参し看護技術の参考としていた。また、「他の患者さんに手伝いに行ってるときとか、あ、こうやって工夫してるんだっていうのを見て、自分の患者さんに取り入れるところはしたり」と他の学生の看護技術を参考にすることで、基礎看護学で学んだ知識や技術を臨地実習でさらに向上させることができていた。

カテゴリー【基礎看護学の学習環境が整っていたことに気づく】は、〈実習に出て学校の良いところを感じる〉〈実習前の演習に対する態度や教員との関りに対する後悔〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。「学校の物品がそろってるなって。そろい過ぎってぐらいそろえてくれてる」と学内での練習で使用する

物品もそろっていることで学校の環境の良さに気づいている反面、「もっとちゃんと先生に、分かんないところは分かるまで聞いたりとか、あの、もっとちゃんといろんなこと練習しときなっていうのを過去の自分に言うなら言いたいな」と学習環境が良い中でもっと練習しておけばよかったと後悔をしている一面もあった。基礎的な看護技術の習得のために学内の環境が整えられていることを臨地実習での看護実践の体験を通して振り返っていた。

2. 「結びつけられないでいた」という認識

学生が「結びつけられないでいた」という認識を示したカテゴリーは8カテゴリーであった。（表2）

カテゴリー【授業中は実習のイメージが湧かず実習中は授業を振り返ることができない】は、〈基礎の授業中に実習のイメージはない〉〈記録に追われ看護技術を振り返る余裕がない〉〈実習中は必死なため基礎の授業は思い出さない〉の3つのサブカテゴリーから構成されていた。学生は基礎看護学の授業を「実習行っていないイメージができないので、生活援助とかはしようがないのかなっていう気がします」と感じながら受けていた。また、臨地実習中も「あれ（記録）に追われて、あんま看護技術を振り返る時間っていうのは本当に、準備してるときにこう、見るぐらいだった気がします」と実習記録に追われており、自身の看護技術を振り返る余裕を持っていなかった。そのような実習環境の中で、「出てきたかな？ 基礎は出てこなかった。そこは必死。どうしようで必死です」と患者に対する援助で必死となり基礎看護学の授業内容を思い出さず余裕を持てていなかった。

カテゴリー【不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない】は、〈実技テストは緊張を伴う〉〈不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。「実際に患者さんのところに行くときと同じ緊張感があるから」と学生は基礎看護学の授業内で実施されている実技試験を緊張しな

表2

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
授業中は実習のイメージが湧かず実習中は授業を振り返ることができない	基礎の授業中に実習のイメージはない	授業中に実習のことは思わない 実習に行かないと実習のイメージはできない
	記録に追われ看護技術を振り返る余裕がない	実習記録に追われ看護技術を振り返る時間は少ない 実習中は記録に追われていた
	実習中は必死なため基礎の授業は思い出さない	実習中に基礎の授業を思い出さず余裕はない 援助中は必死で基礎の授業は出てこない
不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない	実技テストは緊張を伴う	実技テストはすごい緊張感があった。 実技テストは実際に患者さんのところに行くときと同じ緊張感がある
	不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない	緊張で実技が抜ける 不安が強く原理原則は考えられなかった
既存の授業方法に対する思いや要望がある	授業方法への要望	教えてくれなければ授業の意味がない 実技のポイント教えて欲しい
	授業方法への思い	授業をグループ分けして丁寧に教えてくれたのは良かった 授業を丁寧に教えてもらったのがやっぱり良かった
看護技術に慣れることで看護ケアが雑になる	慣れることで看護ケアが雑になる	援助を行ううちに慣れてしまい作業になる 手順をわかっているとも考えずやってしまう
看護ケア機会の減少と看護技術が定着していないことで達成感が得られない	患者の状況変化に伴う看護ケア機会の減少	患者の自立度が高いとケアをやらず実習が終わる リスクの高い患者の移乗は看護師が行う
	看護技術が定着していない	実習の最後まで看護技術はできていない 看護技術ができた自信はない
覚えた原理原則は看護技術の種類によって実践できない	原理原則の理解は技術の種類によって異なる	実習で忙しいと原理原則は意識できない 指摘される部分は原理原則に基づいたところ
デモンストレーションを前提とした授業がわかりやすい	ビデオ学習だけではわからない	ビデオを見ただけではわからない ビデオの分りにくさがあった
	デモンストレーションの見学がわかりやすい	ビデオを見てデモンストレーションを行い演習をしたい デモンストレーションが一番わかりやすかった
指導の際に学生の未熟さを理解して欲しい	学生の未熟さを理解して欲しい	実技の流れは理解しているがゼロベースだと分かってほしい 不安を抱えたまま授業に行くのが不安

がら受けていたが、臨地実習ではその緊張や不安などで「(技術の原理原則) 抜けちゃうって。その、やっぱり緊張と……」と適切な看護技術が行えていなかったと感じていた。

カテゴリー【既存の授業方法に対する思いや要望がある】は、〈授業方法への思い〉〈授業方法への要望〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。「生活援助技術の授業とか、フィジカルの授業もグループ小分けして丁寧に教えてくれたので、なんかすごく、そこはすごくありがたかった」と既存の教授方法について有難みを覚えている反面、「でも、ポイントの一つとかをこう、やってるうちに教えてくれれば良かったな。それで、ちょっと違っただけで『あっ』てなるから」と臨地実習で活用できる看護技術のポイントをもっと細かく教えてもらいたいという要望も持っていた。

カテゴリー【看護技術に慣れることで看護ケアが雑になる】は、〈慣れることで看護ケアが雑になる〉の1つのサブカテゴリーから構成されていた。「私は、なんか初めのうちは『あ、このたびにこうやんなきゃいけないんだ』とかすごい思うんですけど、結局、やっていくうちに慣れちゃって、ま、作業になっちゃってるのはあったと思います」と、学生は看護技術を繰り返し経験し慣れるに従いケアが雑になると認識していた。

カテゴリー【看護ケア機会の減少と看護技術が定着していないことで達成感が得られない】は、〈患者の状況変化に伴う看護ケア機会の減少〉〈看護技術が定着していない〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。「ちょっとリスクの高い方だったので、その、ほんとに車椅子の置く場所とかは、その原理原則に基

づいて自分がセットはするんですけど、移乗はその看護師さんがやるっていう」と、患者の状態を考慮し学生では行えないケアが多く、また「やっぱ、あの、自立度が高い患者さんだと、結局、やらないで終わっちゃうケアとかも出てきちゃうので」と臨地実習中のケアの経験が少なくなっていた。そのような状況の中で、「(看護技術が)できてなかったです。なんか最後までうまくできたかって言われると、うんって言いたくない」臨地実習の最後まで看護技術が上手く行えていなかったと感じていた。

カテゴリー【覚えた原理原則は看護技術の種類によって実践できない】は、〈原理原則の理解は技術の種類によって異なる〉の1つのサブカテゴリーから構成されていた。「原理原則って言われて、うーん、あんまり意識したことないかなって思って、忙しくて、実習やってるこっちも実習であたふたしてしまっていて」と基礎看護学の授業で習得した看護技術の原理原則も臨地実習では思い出す余裕もなく、「実習中も授業中も、やっぱできてないと指摘される部分って、そういう原理原則に基づいたところだと思うので」と習得した看護技術の種類によっては実践できていなかった。

カテゴリー【デモンストレーションを前提とした授業がわかりやすい】は、〈ビデオ学習だけではわからない〉〈デモンストレーションの見学がわかりやすい〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。既存の教授方法であるビデオ学習に対して、「細かくてちょっと見えないから、今、こっち左寄ったのかな、右寄ったのかなとか、そういうのが分かんなくて、なんかその、ビデオの分かりにくさとかがあって」と初めて学ぶ方法としてはわかりにくいという考えであった。また、「デモンストレーションもやって、で、じゃあ、やってみましょうのほうが良かったのかな」と看護技術を学ぶには学生の目の前で行われるデモンストレーションが効果的であると感じていた。1, 2年次の学生は

まだ初学者の段階であり、臨地実習で実際に看護実践を行うためにより効果的な教授方法を求めている。

カテゴリー【指導の際に学生の未熟さを理解して欲しい】は、〈学生の未熟さを理解して欲しい〉の1つのサブカテゴリーで構成されていた。「大体流れは理解してるけど、私たちはゼロベースってことを理解した上で授業をしてくれると、さらに効果は高まる」と基礎看護学の授業での指導に対する要望を持っていた。1, 2年次と臨地実習にでている3, 4年次では学生の技術や知識の習得に違いがあるため、習得状況を踏まえた指導を求めている。

VII. 考察

1. 「結びついている」という認識

学生は臨地実習を経験していく中で、看護技術の到達度の自己評価も向上する¹⁴⁾。【実習当初はケアが上手くできないが経験していくことで看護ケアが上達する】も学生が実習を経験していき看護技術を行う頻度が増えていくことで看護技術が上達したと考えられる。臨地実習における日常生活援助技術の実施率は比較的高い傾向にある¹⁵⁾ため学生にとっては習熟しやすい状況であったと考えられる。また、看護技術について学生は【授業で繰り返し練習を行い実習中も練習することで身につく】と認識していた。これは、看護技術は繰り返し行うことで「身につく」という学生の認識であり、1, 2年次の基礎看護学の演習の時から看護技術を反復練習し、臨地実習でも引き続き学生が経験できるよう調整を行うことが重要であることを示唆している。田中は¹⁶⁾看護技術の習得レベルを向上させるには、学内演習の一層の充実が望まれるが、演習の時間に限りがあり、注射や導尿、浣腸や経管栄養の実施の技術については習得のレベルまで到達できていないと指摘している。しかし、本研究では、臨地実習でも実施機会が比較的多い基礎看護学の「生活援助技術」や「フィジカルアセスメント」に焦点を当てたため、

学生は基礎看護学で習得した看護技術を実践でき、かつ身についたという実感を持たたと考えられる。さらに田中は学生が自己学習できる環境と方法を整備していくことも重要な課題として挙げている。学生は自身の大学の環境を【基礎看護学の学習環境が整っていたことに気づく】と認識していた。臨地実習に出る前に病棟と同じ環境や物品で看護技術の練習を行える環境を整えることも重要であるが、学生に、その環境を活用し臨地実習のイメージを思い描きながら技術練習が行える学習方法を示していく必要もあると考えられる。学生が看護技術を経験する中で、【指導者や教員からのポジティブフィードバック、患者からの言葉を受け止める】のように周囲からの客観的な評価を素直に受け止めることで看護技術の自信へとつながっていた要素もあった。さらに、不十分な看護技術に対しては【自分と友達を比較しあいながら授業資料以外の資料を活用し実習を経験していく】など実習グループのメンバーの看護技術を参考にして、工夫を凝らしながらさらに実習経験を積んでいた。このような学習経験は、【基礎の授業を土台として実習で看護技術の応用を学び看護ケアをする】を表していた。学生は教員や指導者からフィードバックを受け、看護技術を経験し上達すると授業を振り返り看護実践との結びつきを実感できていた。

基礎看護学の看護技術指導と臨地実習での看護実践は、学生の看護技術習得の一連の流れの中に位置する。そのため、基礎看護学における看護技術指導から臨地実習での看護実践では、学生に対する一貫した肯定的な指導が基礎看護学の授業内容や演習と臨地実習での看護実践との結びつきを強くするものと考えられる。

2. 「結びつけられないでいた」という認識

近年、患者の個人情報保護や権利を擁護するため受け持ち患者の疾患や状態によっては、到達または実施できる看護技術の項目が著しく少なくなることがある¹⁷⁾。【看護ケア機会の減少と看護技術が定着していな

いことで達成感が得られない】は、学生が実践するケアの減少により臨地実習での達成感が得られていない現状が浮き彫りとなっている。また、【不安や緊張で適切な看護ケアが実践できない】ため学生は本来の看護技術が行えずこれも達成感が得られていないことがわかる。看護ケアの機会の減少、不安や緊張で看護実践が学生の本来の手技で行えない実習環境では、基礎看護学の授業で習得、練習してきた看護技術の発揮とはなっていなかったと考えられる。川島は¹⁸⁾実習指導では、学生が困惑しないように具体的に方向性を示し、教員がモデルを示していくことが必要と指摘しており、また、学生の看護技術実施についても教員は臨床指導者としてより詳細な話し合いを持つことが必要¹⁹⁾とされている。学生は基礎看護学の授業で基本的な看護技術を学んでおり、また看護技術は経験していくことで上達していく。学生が習得している看護技術を看護実践につなげていくためには教員と指導者が調整を行い、看護実践を十分に実施できるような配慮が必要となる。また、不安や緊張で本来の看護技術が実施できない学生に対しては、教員や指導者が率先して介入し看護モデルを示していく必要性が示唆された。

基礎看護学の教授方法に対して学生は、【既存の授業方法に対する思いや要望がある】ことが明らかとなった。現在 ICT など様々な工夫が取り上げられているが、【デモンストレーションを前提とした授業がわかりやすい】とあるように、学生は目の前で教員が実際に看護技術を実施することがわかりやすいと認識していた。実際に看護専門学校、看護系大学の7~8割の教員はデモンストレーションを実施し、学生指導を行っている²⁰⁾。しかし、目の前で実施されている看護技術を臨地実習での自身の看護実践といかに関係させていくかが重要であり、学生が臨地実習での看護実践をイメージできるような教授方法が必要となる。学生はまた【指導の際に学生の未熟さを理解して欲しい】と望んでいた。川島は²¹⁾は学生の心情を汲み取り、

学生の成長につなげる支援が必要と指摘しており、看護技術一つをとっていても学生の学修段階に合わせた技術指導が必要であることが考えられる。また、【覚えた原理原則は看護技術の種類によって実践できない】とあるように学生は習得した看護技術をそのまま臨地実習で実践できないと考えており、基礎看護学の授業で習得した看護技術でも臨地実習では実践できない学生のフォローこそ必要となってくる。

基礎看護学の授業でデモンストレーションなど、実際の看護技術を見る体験をしてもそれにより臨地実習での自身の看護実践をイメージできていない現状があった。また、臨地実習では記録物など学生は絶えず必死になっており、看護実践中に授業で習ったことを思い出し振り返る余裕もなかった。【授業中は実習のイメージが湧かず実習中は授業を振り返ることができない】には、学生がおかれている状態が表されていた。臨地実習の経験が浅い1, 2年次の基礎看護学の授業では学生は先を見通せていないため、自身の看護実践のイメージ化ができるような授業が必要である。また、臨地実習中は看護実践に必死になっているために、自身の看護実践を振り返る余裕を持っていなかった。学生が基礎看護学の授業で学んだ知識や看護技術を振り返られるような実習指導も必要となってくる。学生にどのように臨地実習での看護実践をイメージさせ、実習中も今まで学んだ知識を用いて看護技術を振り返ることができるように指導するかが課題となる。

学生は臨地実習での看護実践がこういったものであるのか見通せていない1, 2年次の基礎看護学の授業時や3, 4年次の臨地実習で看護実践に必死になっているその瞬間には学んだ知識や看護技術の基本を結びつけられないでいた。経験が浅い段階で精神的、時間的余裕のない状態の中では、学生は今までの多くの学びをその場では結びつけられないことが示唆された。

VIII. 本研究の限界

本研究の対象者は1大学に在籍する看護学生10名であり、臨地実習における配置病棟や実習内容、経験した看護技術の学生間の違いなどが影響していることが考えられる。

IX. 結論

本研究を通して、以下のことが明らかになった。

1. 全臨地実習を終了した看護学生は、「日常生活援助」「フィジカルアセスメント」の授業内容と臨地実習での看護実践との結びつきの認識として、「結びついている」は6カテゴリー、「結びつけられないでいた」は8カテゴリーが抽出された。
2. 学生は臨地実習において、教員や指導者からフィードバックを受けながら看護ケアを経験し上達していく過程において、授業内容と看護実践の結びつきを認識していた。
3. 実習の経験が浅い段階での基礎看護学の授業は先を見通すことができないために自身の看護実践のイメージが湧かず、実習中は緊張や看護ケアに必死になるためにその場では結びつけられないでいたと認識していた。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研究にご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

本研究は、2018年度順天堂大学保健看護学部共同研究の助成金を得て行った。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2007.4.16) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 < <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> >

- 2) 文部科学省 (2002.3.26) : 看護学教育の在り方に関する検討会報告 < https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm >
- 3) 厚生労働省 (2008.2.8) : 助産師、看護師教育の技術項目の卒業時の到達度について < https://www.hospital.or.jp/pdf/15_20080208_01.pdf >
- 4) 金城忍 : 看護基礎教育における看護技術教育に関する研究の動向 -2001年から2009年に発表された研究論文の分析を通して-, 沖縄県立看護大学紀要, 12, 105-112, 2011.
- 5) 厚生労働省 (2019.10.15) : 看護基礎教育検討会報告書 < <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> >
- 6) 本田由美, 升田茂章, 青山美智代 : 基礎看護学実習において学生が経験した看護技術, 奈良看護紀要, 12, 79-88, 2016.
- 7) 文部科学省 (2020.3.30) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告 < https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf >
- 8) 鈴木珠水, 萩原英子, 他 : 成人看護学 I (慢性期) 領域における基礎看護技術の現状と課題; 技術項目到達度表の分析から, 群馬パース大学紀要, 10, 45-55, 2010.
- 9) 北林司, 小池菜穂子, 萩原英子, 他 : 成人看護学 II (周手術期・クリティカルケア) 領域における基礎看護技術教育の現状と課題; 技術項目到達度表の分析から, 群馬パース大学紀要, 10, 57-65, 2010.
- 10) 中岡亜希子, 岡崎寿美子, 他 : 基礎看護学領域における学生の看護技術習得に向けた技術教育のあり方に関する研究, 千里金蘭大学紀要, 8, 132-143, 2011.
- 11) 坂田五月, 佐藤道子, 他 : 分散型基礎看護学実習 II において学生が経験した看護基本技術の現状, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 22, 27-36, 2014.
- 12) 前掲書 4)
- 13) 佐藤学 : カリキュラムの批評 - 公共性の再構築へ -, 世識書房, 31, 1998
- 14) 掛谷益子 : 看護学生の日常生活援助技術の到達度と経験状況の変化 ~ 基礎看護学実習後と領域別看護学実習後の比較 ~, 吉備国際大学研究紀要, 23, 39-46, 2013.
- 15) 野並由希, 松村晶子, 安藤千恵, 他 : 臨地実習における看護技術の経験の実態 (第2報), 高知学園短期大学紀要, 43, 31-46, 2013.
- 16) 田中愛子, 藤本美由紀, 井上真奈美, 他 : 臨地実習終了後の看護基本技術の習得状況から、基礎看護学の技術教育を考える, 山口県立大学看護学部紀要, 11, 35-43, 2007.
- 17) 前掲書 7)
- 18) 川島良子, 馬場美幸 : 基礎看護学実習における教員の日常生活援助の指導と学生が役立ったと感じた指導, 愛知県立大学看護学部紀要, 23, 95-107, 2017.
- 19) 前掲書 7)
- 20) 大津廣子, 佐藤美紀, 滝内隆子, 他 : 学内実習における教員の基礎看護技術の実施状況と指導方法, 愛知県立大学看護学部紀要, 19, 31-40, 2013.
- 21) 前掲書 18)